Navigation

Previous 月
Next 月
Today
Archives
Admin Area

Categories

All
General

灰皿町の本

●幻想小説『なめくじキーホルダー』 清水鱗造

●「週刊読書人」詩時評 一九九二-一九九三年 清水鱗造批評集 第一分冊

Search

検索キーワード

検索

Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_

2020-06-24

夏至の早朝と夕暮れが不可欠なものを明るい―*二宮考古館*

　久しぶりにここに来た。ことはどこだろう。創造（想像）の世
い。それまでどこにいたのだろう。想像と日々はつながっている。
はもろい線であるかもしれないがつながっているように。
　三月からの新型コロナウイルス感染症関連の影響…。わたしはど
う。日々に流されていた。日々のなかで、バタフライエフェクトを
ていた。蝶の羽ばたきが、つらなって、波を起こす。ひとつの病が
活に。
　本はすこし読んでいた。〆切のある仕事もしていた。バイトは物
響で忙しくなったが、チラシ投函などは仕事が減った。編集に携わ
ペーパーの刊行も夏号は休刊となった。
　季節はもう梅雨、そして夏至を過ぎた。
　わたしはこの時期が好きだ。いや、夏至に向かうまでが好きだっ
出す。夏至までは日が長くなる。早朝バイトは一年を通じて、大半
勤しているので深夜バイトといった感じがある。だが、夏から晩夏
をはさんだ数ヶ月だけは、ほんとうに早朝バイトといった感じにな
かける時分はまだ暗いが、鳥たちが賑やかだ。朝を彼らは知ってい
すぐに東の空が明るくなる。それがうれしい。そして夕方。冬だと
なっていたが、夏至の頃は七時過ぎてもまだ明るい。昼が長くなっ

なったような気がする。そんなことはないのだが、その感触がやさたしのまわりで、しずかに、おだやかに過ぎてゆく。
　もう六月二十一日は夏至…。それ以降は当たり前だが日が短くなで夏休みみたいだなとぼんやりと思う。夏休みに入ったばかりの七ゆっくりと時間が流れている。八月十五日をすぎるとあっという間なったっけ。今年は夏休みも短いようだけれども。
　といっても、夏至の頃の明けの空の明るさを、夕方の長さを、梅感させてくれない。それもまた、風物詩だ。けれども、今年はなん空を感じることが多い、雨も降っているのだが、雨越しにも空の明ホタルブクロが、あちこちで、見頃をむかえ、もうそろそろ終わりサイが色鮮やかだ。ノウゼンカズラが咲き始めた。オレンジ色、夏まぶしげで、けれどもつつましい。

　都道府県をまたぐ移動の自粛が六月十八日をもって解除された。曜日は梅雨の晴れ間だ。前から行きたいと思っていた、あきる野市

Login

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

Powered by

nucleus

行ってきた。同じ都内だが、なんとなく、この解除を待っていたの
一時間、三十キロちょっと離れている。大雑把にいうと、多摩川を
じ。
　道はかなり混んでいた。自粛解除で、わたしたちのように多くの
出かけていたのだろう。渋滞する道路はゴールデンウィークのよう
う。多摩川の河川敷にも人がいた。ボードセーリング、パラグライ
野球など。マラソンをする人、サイクリング、マスク姿は多いが、
うだった。
　途中日野を通る。日野といえば、わたしが子どもの頃から好きだ
長土方歳三ゆかりの地だ。高幡不動を通ると、彼ゆかりのお土産を
見えた。門のなかには銅像も。高幡不動はアジサイの名所でもある
いた。土方さんは、土方歳三うどんやまんじゅうが売られているこ
どう思うだろうかとふと思う。けれどもたぶん、彼にとって、ほぼ
とかもしれない。とおい眼でみるかもしれない。けれどもわたした
とで、彼の生き様を感じることしかできないのだ。車のナビに石田
てきた。彼が生まれたのが石田村だった。車の窓からその方角を見
つぽつと見られた。植わったばかりの稲がまだ弱々しく、張った水
した田んぼを見るのも久しぶりだと思う。
　結局一時間弱で着くはずが、二時間以上かかった。着いたのが三
時閉館というので、間に合ったというか、ちょうどいいというか。

　二宮考古館は二宮神社に隣接している。来館者用の駐車場に車を
たしたちのものだけだった。
　以前、東京の縄文といった感じでネットで調べたところ。自粛解
博物館などは、予約制になったところもあるが、こちらはマスク着
時に連絡先記入するぐらいだった。入場制限も無論あったが、来館
二人をのぞいたら一人きり。静かにゆっくりと楽しめた。ひさしぶ
さしぶりの縄文土器、土偶たち。こんなふうなことが当たり前にな
が戻ってくるということなのだ。
　ドイツ政府のコロナウイルスの経済支援対策時の、グリュッター
が頭に浮かんだ。「芸術家は必要不可欠であるだけでなく、生命維
だ。」
　第二次世界大戦時、ヒトラー政権時に、様々な貴重な美術品が消
史的経緯も鑑みなければならないだろう。こうした国から発せられ
し、わたしが感じる芸術たちとは、いろいろな意味で違うかもしれ
も、ともかく悲しいことだが、芸術がなくとも、人は食べてゆける
べて、働いて、寝るだけなら。それはほぼ機械ではないか。芸術が
は、わたしにとっては想像世界がないということだ。それがなくて
ているといえるのだろうか。芸術とは、ささいなことでいいのだ。
えば季節ごとの動物に気づく、花に触る。そのほんの少しした延長
つりに出かける。それがなくなるということも含めて、芸術なのだ
　博物館、美術館、図書館、動物園、公園も、ずっと閉館していた
を書いている今もまだ、書架への立ち入りは出来ていない（わたし
ころは６月２４日から再開した）。
　話がそれてしまった。最近ここを書いていなかったから、その分
うとしているのかもしれない。
　ともかく待ちに待った二宮考古館。こんなふうに展示しているも
のだろうかと、とまどいすら覚えた。そのことにありがたみを感じ
　あきる野市内には、秋留台地を中心に流れる秋川と平井川の流域
器時代から中世までの多数の遺跡が分布しており、二宮考古館では

土である土器や石器を展示している。
　目当ては縄文時代、縄文土器たち。触らなくとも、見ただけでな
が、彼らの手が感じられる。この感触も久しぶりだ。土器片、特に
年から四〇〇〇年前）のもの。このあたりでも、最も栄えた時期で
らしい。人の顔や蛇やイノシシのような装飾のある勝坂式土器、胴
形で口がややひろい加曾利式土器などがあった。
　獣面把手（土器の口縁部につけられた獣の頭部のような装飾の把
はイノシシが多い。力を持つ獣だったからだと、どこかで読んだ。
把手もある。そして代継遺跡出土の顔面把手。こちらは山梨や長野
る。口も目も孔で表現されている人の頭部。髪は装飾的だ。土偶の
に感じられるのは気のせいだろうか。有孔鍔付土器もあった。口縁
起した帯と、小さな孔が開けられているもので、ここにあるものは
のものだが、後ろの参考写真は長野県藤内遺跡出土のものだった。
うな文様。

町田市の本町田遺跡の顔面取手土器の一部の解説として、「現在
県にあたる地域の縄文時代中期の人々が土器の一部として作り始め
います」とあり、水子貝塚資料館では、羽沢遺跡出土縄文土器のキ
「この土器と同じ「猪」の装飾の付いた土器は、（中略）甲府盆地
地、多摩丘陵が分布の中心です。また胎土には甲府盆地の土器の特
雲母を含んでいます。これらのことからこの土器は甲府盆地周辺か
われます」とあった。似ているなと思ったとき、このことが頭に浮
した、いつも縄文土器などを見ているときのとりとめのない思念の
て、それがすこしうれしかった。土器たちをながめ、あれこれ思い
のようなものを想像する、彼らの姿をどこかで感じる。こうしたこ
ようになって、そのことが。

わたしはこの長野・山梨系の土器が好きなのだなと改めて思う。
は少し違うかもしれない。縄文時代にあまり興味がなかった二十代
迦堂遺跡博物館にいったことがある。桃を見に行ったのか、山梨の
行ったのか。ともかく顔面把手や獣面把手をみたことが記憶のどこ
しれない。あるいは自分が住んでいる場所あたりからの出土品たち
なにか共感のようなものを感じているのかもしれない。

二宮考古館では、資料的なもの、図録のようなもの、あまりよく
見当たらない。リーフレットを頂いてくる。二宮森腰遺跡出土の土
めに拡げたＹの字になっているのだが、それが表紙で、「ようこそ
手をあげて迎えてくれるようでほほえましい。

　二宮神社に寄って帰路へ。帰りの道も混んでいた。やはり行きと間かかり、買い物などもしたので、家に着いたのは七時すこし前ぐだ空が暮れ残っている。また少しずつ、日が短くなってゆくのだなう。

19:08:06 - **umikyon** - **No comments**